

教 仏 名 聞

第14号
(発行日)

2011年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は、2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

不 信 仰 から 信 仰

A 「浄土真宗では浄土とか阿彌陀仏とかが説かれますが、現代人は「浄土がある」とは信じられない」「阿彌陀仏の存在が信じられない」という人が多いですね」

D 「そうですね」

A 「浄土も阿彌陀仏も、その存在を信じられない現代人はどうしたら救われるのでしょうか」

D 「キリスト教などでは「神は実在しているかどうか」「神の存在証明」を論議することが多いのですが、仏教の歴史の上では「浄土があるかないか、阿彌陀仏は実在しているかどうか」を論議することはありません」

A 「なぜ仏教では仏や浄土の存在を証明しようという論議がなされなかったのですか」

D 「阿彌陀仏とか浄土の本質は真如（真実ありのまま）といわれています。それは色もなく形もない無限定な真実そのものであって、人間の分別的認識によってとらえるこ

とができないといわれ、実地に経験的に感知するほかないものとされています」

A 「そうすると仏や浄土を感じていない者が、いくらそれを外に認めようとしても、見つかからないのですね」

D 「ええそうです。仏も浄土も外界にいくら探してもそれを認めることはできるものではないのです。だからといって無いではありません」

A 「外に確認できないけれども無いのではない」

D 「ええそうです。仏や浄土のみならず、迷える私たちが外界に確認できないものはいくらもありです。早い話、心の存在は私の外にある客観的なものとして見つけることはできないでしょう。AさんBさんの心は、AさんBさんを見てもつかんでも実物として認めることはできません。見えているのは肉体だけです。見えなからといって心が無いとはいえません。むしろそう言ったり考えたりしている

せん。心は外に対象的にその存在を見つかることはできませんが、何時でも今ここで経験的に感知されているものです」

A 「迷える私たちが阿彌陀仏とか浄土の実在を对象的に確かめるようにすることそのところがすであやまりなのですね」

D 「ええそうです。大体、阿彌陀仏とか浄土といわれる真実そのものを深く感知した人、いわば覚った人、例えば釈尊や龍樹菩薩などの聖者が、覚知された真実ありのままを如来とか浄土とか阿彌陀仏とか、そういう言葉で表現されたのです」

A 「感知するというのはどういうことですか」

D 「それは、分別するとか知的判断するとか考えて知るというのではなくて、直接的、直観的、経験的に知ることです。いわゆる悟るとか目覚めるといわれるような知り方のことです」

そのものが心であることはだれでも感知していることであり、今さらあるかないかと論議する必要はありません」

A 「浄土や阿彌陀仏の存在が信じられないどころか感知などとも出来ない現代人である私はどうしたらいいでしょうか」

D 「浄土の教えは、そういう愚かな凡夫のための教えです。仏や浄土を信じたり、いわんや感知したりすることの出来ない人は、まず信じられないまま感知できないまま、お念仏を申すところから道がつけられています。禅宗などでは、論議したり考えたりする前に「まあ坐れ」と坐禅を勧めようですが、浄土の教えでは、そういう人に「南無阿彌陀仏と称えてみよ」とまづ仏の名を称えることを勧めめるのです。そこが入り口です。浄土や仏が信じられないまま、感知できないままナムアミダブツと申すことはできません」

A 「ええ、それはできますが」

D 「浄土や仏が信じられなくても、日々の苦しみや悩みやうっとうしさなど、いろいろなわずらい悩みが誰でもあるはずですよ。そして多くの人は「今の状態ではいけない」「こんな私ではいけない」「なんとかしなければ」と思ってます。そしてどうしてみようも

ないままずると生活して
います。そういう人に仏法の

先達はへどうにもならねば南
無阿弥陀仏とそのまま念仏し
ていけ」と先ずはお勧めにな
るのでありましょう。――た

だし、阿弥陀仏は「我が名を
称えよ、助ける」と仰せられ
ていて、救いは何時でも現在
しているのですが――。阿弥陀

仏を信じられなくても、苦
しかつたら、そのまま念仏し
て行け」という先人の言葉は、
いろんなさわりの多い人にと

ってはナムアミダブツナムア
ミダブツと称えずにはおれな
くなりましょう。それが入り
口になるのです」

A「苦しみや悩みの始末に困
ったまま、へそのまま称える
ばかりでよい、その外に何も
いらぬ」と聞けば、ナムアミ

ダブツと称えてみるることなの
です」

D「ええ、自分の苦しみの中
で、まずはお念仏を申すこと
を選ぶかどうかで、真実にて

あう道を歩むかあるいは一生
やりきれなさを抱えながら生
涯を終えるかの一つの分かれ
目になります。あとは日々、
わずらい悩みが起るのを縁
として、起るままナムアミ
ダブツナムアミダブツと称え

つつお念仏を聞いていけばい
いのです」

A「わずらい悩みの心をどう
する必要はなく、起るまま
苦しいままお念仏を申し、お
念仏を聞いていくのです」

D「ええそうです。お念仏が
口に出るようになれば、おの
ずと耳にナムアミダブツと聞
こえてきます。聞こえる南無

阿弥陀仏がどういう意味であ
るかをよく聞くこと、これが
一番大事になります」

A「お念仏を聞くとは」

D「お念仏を称えつつ、南無
阿弥陀仏のいわれをよくお聞
かせいただくのです。端的に
申しますと「助からぬ汝をま

るまる引き受ける」へ汝を助
ける」という阿弥陀仏のお助
けが南無阿弥陀仏のいわれで
す」

A「そうするとお念仏を聞く
ということは「汝を助ける」
「助からぬ者を引き受ける」
という言葉を聞くのです」

D「ええそうです。ただお念
仏を聞くといつても初めは
「助からぬ者を助ける」との
言葉を、お念仏を申すにつけ
て「思う」ことになりまし
うが」

A「そうするとどうなるので

すか」

D「こうした念仏聞法の中で、
本当は自分が助からぬ身であ
ることを知らされます。私の
行いは私で責任が取れるのか
どうかといえ、とても責任

は取れそうもない。私のお
粗末な人間性はいつまでも変
わらない。いつまでたっても
利己心から離れられない。そ
れどころか私はいつたい何で

あり、死んでどうなるのか、
まったくお先はまつくらでは
ないか、という現実を知らさ
れてきます」

A「自分の人生の基本は破綻
しており、まったく行き場が
ないことを知らされるので
す」

D「そういう私の現実によつ
かると、称えているお念仏に
おいて「そんなお前だから引
き受ける」へそのままなりで

助ける」とのお心が実に有難
く感じられるようになります」

A「お念仏は私を全面的に受
けとりたもう有難いお働きで
あることが南無阿弥陀仏の言
葉を通して実感されてくるの
です」

D「ええそうなんです。そう
すると南無阿弥陀仏に大いな
る慈悲心を感じるのです。そ

の慈悲のお心が阿弥陀仏のお
心であることが自然に知れ、
阿弥陀仏がましますというこ
とがほのかに知られてまいり
ます」

A「お慈悲が知らされると阿
弥陀仏がましますことが自然
に知れるのです」

D「ええそうなんです。それ
ばかりか、南無阿弥陀仏が私
の救いであることが分かりま
すと、お釈迦様（仏陀）のお
っしゃっていることは本当な
んだなという仏陀の言葉に対
する信頼が出てきます。ごく
自然に「仏語はまことなり」
と受けとられてきます。そう
すると仏陀が「極楽浄土がま
しまして、その浄土に生まれ
させていただけるのだよ」と
説かれていたの言葉の本
当だと聞き受け、「私の分別
では浄土があるかどうかわか
らないけれども、仏陀のお言
葉は真実で間違いがない。浄
土がましますのだな」となり
ましょう」

A「仏陀が「浄土まします。
その浄土こそ汝を迎えたもう
領域なのだ」と仰せ下さる
お言葉を有難く受けとるよう
になるのです」

D「ええそうです。浄土は私

のような愚かな者が到底確認
できませんが、確かなお方（
仏陀）が仰せ下さる言葉を信
頼するところから、「浄土ま
しますのだな、有難い」と愚
かなままでまだ見ぬ浄土をほ
のかながらも信じていること
ができるようになります」

A「そうすると初めは浄土だ
の阿弥陀仏だのを信ずること
はとてもできないけど、苦し
い人生を縁としてお念仏を申
す中から、おのずから慈悲の
お心にふれて、「ああ阿弥陀
様まします」と感じられ「仏
のお言葉は本当なんだな」と
仏の言葉を信頼するようにな
る。そうすると「汝を迎え入
れる浄土まします」と仰せ下
さる仏の言葉を受け入れ、「浄
土がましますのだな、ああ
有難い」と素直に思わせてい
ただくようになるのです」

D「そうなんです。仏や浄土
は、それを私の認識力で確認
することによって信じてるので
はなく、手じかなお念仏を
通して仏の大悲の心を感じ、
仏のお言葉をまことと受け入
れていくところに仏や浄土が
信じられるようになるので
す」

正信偈に学ぶ問答

(二十五)

広由本願力廻向
為度群生彰一心

(書き下し) 広く本願力の回向に由って、群生を度せんがために、一心を彰す。

(現代語訳) 本願の回向によつてすべてのものを救うために、一心すなわち他力の信心を明らかにされた。

*

D 「阿弥陀仏はすべての者を救うてまことの仏にしてやりたいと発願し、思惟し四十八願を選び取り、その中の第十八願に一切衆生を平等に浄土に生まれさせて仏になしたもう法を示されました」

N 「その第十八願の内容は」

D 「かいつまんで申しますと、一切衆生よ、至心に信樂して我が国に生まれんとおもうて(至心・信樂・欲生我國)

念仏申せ、必ず浄土に至らしてめでたにする」との阿弥陀仏のお誓い。ただこの誓いをお誓いと、私たちが、いつわりなきまことの心(至心)を

起こし、疑いなき信心(信樂)を起こし、純粹に浄土へ生まれたいという三つの心を起こすことが求められています」

N 「そう受けとると、私たちがこのような三つの心を起こさなければ浄土に生まれることができないことになり、浄土に生まれることは非常に難しくなりますね」

D 「ええ、ですから天親菩薩はこの至心・信樂・欲生我國の三心は信樂の一心に収まることを示されました。いわゆる(我が名を称えるばかりで助ける)という念仏の誓いを信じる信樂一つ(一心)に収まっていることを教えて下さったのです」

N 「ということは、それによつて私たちは本願を信じる信心一つで浄土に参らせていただくことができるのであつて、複雑で難しい道ではないことが分かりますね」

D 「ええそうです。そしてしかもその信樂の一心も私たちが起こす一心ではなくて、本願力によつて与えられる(回向される)一心であることを天親菩薩はお示しになられたのです」

N 「なぜ弥陀の本願力は私たちに一心を与えられるのでしょうか」

D 「私たちは本願を信じる信樂の一心も到底私たちの中から、私たちの力で起こすことはできないものではないこと、そのことを阿弥陀仏は知り抜かれていて、阿弥陀仏の大悲の御力によつて私たちに回向(与えて)して下さいのです。それゆえその一心は私たちが自分の力で起こす信心ではなくて如来他力の恵みによつて私たちの心と与えられる他力の一心なのです」

N 「その他力の一心はどういう契機で私たちに与えられる(回向成就)のでしょうか」

D 「それは、私たちは煩惱具足の凡夫であつて仏になる種は一つもなく、また本願への疑いを晴らすこともできない、全く無知無能の愚かな凡夫であることを知らされるところに、南無阿弥陀仏はこんな私を引き受けたもうお心であつたと聞く一念においてで

あります」

N 「我が身には救いなしと知らされるところに、南無阿弥陀仏のお心が知れるのですね」

D 「ええ、助からぬ私であつたと知らされる時(助ける)との大悲が我がためであつたと知らされる。そこに阿弥陀仏の大悲心は私の心に届いて(回向されて)信樂の一心となつて下さるのです。本当に不思議なこと。ところがまだ自分は自分でなんとかなると思つていて(引き受ける)との大悲が実感できませんから、いつまでも如来様の大悲に気がつかないのですね」

N 「不思議にも私に信心の一心が与えられた、それは本願力の回向に由つてであると天親菩薩はお示し下さつたのですね」

D 「ええそうです。天親菩薩は『浄土論』という書物の初めに、世尊と呼びかけられて(我、一心に尽十方無碍光如来に帰命して安樂国に生まれんと願ず)と信仰を告白されています。それは、尽十方無碍光如来(阿弥陀仏)の本願にふたごころなく信順(一心帰命)して、安樂浄土に生ま

れようと願います、と天親菩薩は言われ、本願力の回向によつて与えられた本願を信ずる一心で浄土に生まれることを先達として教えて下さつた。それによつて私たちのような愚かなものも阿弥陀仏の本願を信じる一つによつて浄土に参らせていただく道が明らかになつたのです」

(了)

《住職雑感》

去る十月二十二日に谷田峯師が急逝された。林暁宇師の紹介で念佛寺にお越しになり「私のところの道場(広大舎)は日本で一番小さいと思つていたが、ここは(小松北町の家)もつと小さいのに驚きました」と言われたのが最初の出会いで、それ以後何度か石川県からお参り下さつた。北陸という真宗の土壌のかぐわしい香りを自然に身につけておられたお方で、お会いする度に、さすがに真宗王国の中で生を受けたお方だなあと尊く感じていた。念佛寺の報恩講の後、十人ばかりの人と懇親会をした時、料理店でテッチリをたのんだところ、皿に盛られたフグの肉がまだピクピク動いていたので、当惑された表情をされた。殺生の罪は注文した私が負わねばならないのに、谷田さんには申し訳ないことであつた。お念仏の広布のためにもつと長生きをしてほしいお方であつた。

信心夜話

『一蓮院談合録より』(10)

(太字の文が一蓮院秀存師の言葉です。カ
ツコ内は私の所感)

雲溪師いわく。

私一人を助ける事にこまる親様ではないほどに、我が身は大悪人、地獄より外にゆき処のないものなれども、よくもならぬ、持ち合わせの心のまま、今据(すわ)っているままで息がきたら仏にするとあるが、このままで仏にするとあるがこのままで仏にするでは悪いかどうかだ。

(私は、(我が身は大悪人、地獄より外にゆき処のないもの)であるとも知らない愚かな者である。いつまで聞いても極重悪人とは実感できぬほどの愚かな者である。ただ煩惱だらけの人間であることは日々実感している。そして我愛我執の深い者であると少しは知らされたようである。そういう我執我愛のかたまりの様な者を悪人と言われるなら、そうに違いない。問題は我が身の悪を知っても、その悪をどうすることもできず、持ち合わせのまますわっているしかない私だということである。善を知ってもその知った善をなす事ができず、己の悪を知っても知ったその悪を改めることができない。そんな私がここにすわっている。時々、

真宗は自己を知る
教えであると言つ
て、盛んに自己批
判をし、自分の悪
ややましさを醜
さをえぐるばかり
の話があるが、ど

れだけ自分のおどましい姿を知っても、その悪をどうすることもできず、悪と共にどこまでも闇にさまようていかねばならぬ私のままである。悪を少し知ってもあるいは深く知っても、悪は除けないままの私がいる。悪を知っただけでは、それは単なる自己批判であつて救いの光はない。たとえ私が(申し訳ありません)(おはずかしい私です)と懺悔しても、悪はなくならない。私の元にある。しかるに今、私に喚びかけて下さり、来て下さっている南無阿弥陀仏は有難いことに、そんな私を目当てに(悪しき汝を丸々引き受ける。助ける。悪や罪はいかほどあろうとも汝の責をすべてになうから、安らいでくれよ)と仰せ下さる南無阿弥陀仏である。この南無阿弥陀仏は、私の今このままで息が切れても仏にして下さること)

信心を得ぬと地獄へ落ちるぞ。信心を決定すると云うはお助けを決定することじゃ。その上は念仏を申すことじゃ。

(最近(信心を得ぬと地獄へ落ちるぞ)というようなお説教はほとんど聞かなくなつた。だから(このまま死んでいけません。どうか救われたい)と必死になつ

て聞法をする人が非常に少なくなつた。それどころか今日の法話では(この世が終わればみんな浄土のいのちに帰るのですよ)といった逆の話が多くなつた。こゝうなると信心も念仏もいらす、ただ死にさえすれば阿弥陀仏のいのちに帰ると受けとられかねない。これでは真剣に佛法は求めないばかりか佛法無用になる。世間で言う(死んだら仏)と変わらなくなる。しかるに蓮如上人も一蓮院師も(信心を得ぬと地獄へ落ちるぞ)と教えて下さり、お助けを決定せよとお勧めになる。

現代人は、ちまたで言われるような血の池地獄とか針の山の地獄はもちろん信じない。しかしそのように地獄が言われてきたのは(地獄の苦)を何とか表現しようとするイメージ表現であるのはいうまでもない。では現代の地獄とは何か。地獄とは虚無の闇と苦と孤独の極まれ状態であると言えよう。死んで行くのは、

実際この世での究極の孤独であり、無窮の虚無の闇に入るが如くであるといえよう。死に際になると先ず目が見えなくなるとは疑いがなく、そして私は一体どこへ行くのか。全く分からぬ、不可解である。不可解は同時に不安である。このまま死ぬとなるとそれこそ地獄であろう。そんな地獄は決して遠くはない。程なくして現実となる。その崖つぶちにいる私に今、南無阿弥陀仏と救いの親が私に喚びかけて下さる。(我が身はそんな汝を助けるまことの親であるぞ)と。その南無阿弥陀仏のお助けは、虚無に転落するしかない私のためであつたといた(決定した)上は、南無阿弥陀仏とお念

仰せに、南無とはたのむこと、阿弥陀仏とは助けてくださること。南無阿弥陀仏まるきり私を助けてやろうとのこと。

(南無阿弥陀仏は、南無とはたのむ、おまかせするということ、阿弥陀仏とはお助け下さる阿弥陀仏ということ、私をお助け下さる阿弥陀仏におまかせすること、これが私の側からいつた場合の南無阿弥陀仏である。)

そしてそういう受け取りが私の側に起こるのは、先手かけて喚びかけて下さる南無阿弥陀仏がましますからである。そこで、仏様の側からいうと、南無阿弥陀仏の南無とは、私たちに南無せよであり、それは(たのめ)(依りかかってくれよ)(まかせてくれよ)との大悲の仰せ。阿弥陀仏は(そのまゝなりで助けるから)(まるまる引き受けるから)(浄土へ連れていくから)との仰せである。であれば南無阿弥陀仏は(マカセヨ、まるきり汝を助けるから)(助けてやるで、たのめ)という大慈大悲の親心である)

《念佛寺報恩講》

十二月二十一日(木)

午後二時始

講師 石川県能美郡
浄秀寺坊守 藤原千佳子師